

煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 発掘を逃れし壺や山笑ふ  
 密やかに秘かに神の梅見かな  
 草餅のまだ暖かに子らを待つ  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 花守の為す術もなき花の漏り  
~~雲~~の峰太くて硬き乾電池  
 こんこんと泉古くて新しき  
~~幽霊~~もアイスクリームもどろどろと  
 すやすやと赤子ほのかに天花粉  
~~母~~もなくその母もなき母の日よ  
 端居する人なきままに日が暮れて  
 その中のひときは小さき裸かな  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
~~祭~~笛力合せてゐたりけり  
 蟻一つ浮んでゐたる水たまり  
 胴体の長きを運ぶ蜥蜴かな  
 薔薇園の開園を待つ鉄扉かな  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
~~青~~梅の青き日数や匂ひけり  
~~花~~菖蒲ほんとに雨となりけり  
 赤で消し赤で書き足す夜長かな  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
~~踊~~りゆく目元口元盆の窪

踏切のかんかん照りの終戦日  
 干柿に遠き西日となりにけり  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 菜箸と同じ長さの秋刀魚かな  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 圧巻の雪にひしやげし竹林  
 土くれの中の石ころ枯野原  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
~~爪~~痕もなく全き龍の玉  
 輪になつて一家わははと初笑  
 あはは

煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 発掘を逃れし壺や山笑ふ  
 密やかに秘かに神の梅見かな  
 草餅のまだ暖かに子らを待つ  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 花守の為す術もなき花の漏り  
 雲の峰太くて重き乾電池  
 こんこんと泉古くて新しき  
 すやすやと赤子ほのかに天花粉  
 端居する人なきままに日が暮れて  
 その中のひときは小さき裸かな  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 蟻一つ浮んでゐたる水たまり  
 胴体の長きを運ぶ蜥蜴かな  
 終列車遣り過したる螢かな  
 薔薇園の開園を待つ鉄扉かな  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 赤で消し赤で書き足す夜長かな  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 干柿に遠き西日となりけり  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 菜箸と同じ長さの秋刀魚かな  
 包丁に林檎の種が付いてをる

切株に雪の帽子を被せやる  
 圧巻の雪にひしやげし竹林  
 土くれの中の石ころ枯野原  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 打ち興じあははわははと初笑

発掘を逃れし壺や山笑ふ  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 密やかに秘かに神の梅見かな  
 切株に春の雨こそ明るけれ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 草餅のまだ暖かに子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 花漏りを茶碗に受ける宴かな  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 薔薇園の開園を待つ鉄扉かな  
 こんこんと泉古くて新しき  
 蟻一つ浮かべて小さき子のバケツ  
 母のごとく月のごとくにくらげかな  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 その中のひときは小さき裸かな  
 端居する人なきままに日が暮れて  
 夕立の去つて、物食ふ寂しさよ  
 切株の如き残生蚊遣の火  
 蚊遣火の紅一点の涼しさよ  
 すやすやと赤子ほのかに天花粉  
 踏切のかんかん照りの終戦日

童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 切株の大いなる根や虫の声  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりにけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 菜箸と同じ長さの秋刀魚なり  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 土くれの中の石ころ枯野原  
 切株に雪の帽子を被せやる  
 年号の来年変る炬燵かな  
 太陽と同じ丸顔雪達磨

発掘を逃れし壺や山笑ふ  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 密やかに秘かに神の梅見かな  
 草餅のほのかな温み子らを待つ  
 切株に春の雨こそ明るけれ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 金色の佛も眠る春の闇  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 花漏りを茶碗に受ける宴かな  
 花散つて入園式のチューリップ  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 薔薇園の開園を待つ鉄扉かな  
 蟻一つ浮かべて小さき子のバケツ  
 母のごとく月のごとくにくらげかな  
 仕損じて次の間へ行く蠅叩  
 飛ぶ虫に這ふ虫も来て梅雨入かな  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 その中のひときは小さき裸かな  
 端居する人なきままに日が暮れて

夕立の去つて物食ふ寂しさよ  
 切株の如き残生蚊遣の火  
 蚊遣火の紅一点の涼しさよ  
 すやすやと赤子ほのかに天花粉  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 切株に大いなる根や虫の声  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 菜箸と同じ長さの秋刀魚なり  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 土くれの中の石ころ枯野原  
 切株に雪の帽子を被せやる  
 年号の来年変る炬燵かな  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 雨の夜に螢は歩き赤子這ふ

雨の夜に螢は歩き赤子這ふ  
 雨の夜に螢は歩き赤子這ふ  
 雨の夜に螢は歩き赤子這ふ

発掘を逃れし壺や山笑ふ  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 白梅の秘かに神の梅見かな  
 草餅のほのかな温み子らを待つ  
 切株に春の雨こそ明るけれ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 金色の佛を置いて春の闇  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 花漏りを茶碗に受ける宴かな  
 花散つて入園式のチューリップ  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 薔薇園の開園を待つ鉄扉かな  
 蟻一つ浮かべて小さき子のバケツ  
 母のごとく月のごとくにくらげかな  
 仕損じて次の間へ行く蠅叩  
 飛ぶ虫に這ふ虫も来て梅雨入かな  
 雨の夜を螢は歩き赤子這ふ  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 その中のひときは小さき裸かな

草持の

847

7

4

端居する人なきままに日が暮れて  
 夕立の去つて物食ふ寂しさよ  
 切株の如き残生蚊遣の火  
 蚊遣火の紅一点の涼しさよ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 切株に大いなる根や虫の声  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりにけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 土くれの中の石ころ寒椿  
 切株に雪の帽子を被せやる  
 年号の来年変わる炬燵かな  
 太陽と同じ丸顔雪達磨

金紅を雪に散らす(2) かつスズ  
 キタ- 昔に杉木の中を(判) (4)

たたい 下示  
 拍→2拍子化  
 定句

発掘を逃れし壺や山笑ふ  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 白梅の秘かに神の梅見かな  
 草餅のほのかな温み子らを待つ  
 切株に春の雨こそ明るけれ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 金色の佛を置いて春の闇  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 花漏りを茶碗に受ける宴かな  
~~葉桜~~の入園式のチューリップ  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 薔薇園の開園を待つ鉄扉かな  
 蟻一つ浮かべて小さき子のバケツ  
 母のごとく月のごとくにくらげかな  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 飛ぶ虫に這ふ虫も来て梅雨入かな  
 雨の夜を螢は歩き赤子這ふ  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 その中のひときは小さき裸かな

端居する人なきままに日が暮れて  
 夕立の去つて物食ふ寂しさよ  
 切株の如き残生蚊遣の火  
 蚊遣火の紅一点の涼しさよ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 切株に大いなる根や虫の声  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 金銀を雪に散らしてクリスマス  
 土くれの中の石ころ寒椿  
 切株に雪の帽子を被せやる  
 年号の来年変る炬燵かな  
 太陽と同じ丸顔雪達磨

発掘を逃れし壺や山笑ふ  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 白梅の秘かに神の梅見かな  
 草餅のほのかな温み子らを待つ  
 切株のまだ新しき春の雨  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 金色の佛を置いて春の闇  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 花漏りを茶碗に受ける宴かな  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 薔薇園の開園を待つ鉄扉かな  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 蟻一つ浮かべて小さき子のバケツ  
 母のごとく月のごとくにくらげかな  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨入かな  
 雨の夜を螢は歩き赤子這ふ  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 その中のひときは小さき裸かな  
 端居する人なきままに日が暮れて

夕立の去つて物食ふ寂しさよ  
 切株の如き残生蚊遣の火  
 蚊遣火の紅一点の涼しさよ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 切株に大いなる根や虫の声  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりにけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 金銀を雪に散らしてクリスマス  
 土くれの中の石ころ寒椿  
 切株に雪の帽子を被せやる  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 年号の来年変る炬燵かな

螢は

発掘を逃れし壺や山桜  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 白梅の秘かに神の梅見かな  
 草餅のほのかな温み子らを待つ  
 切株のまだ新しき春の雨  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 金色の佛を置いて春の闇  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 花漏りを茶碗に受ける宴かな  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 薔薇園の開園を待つ鉄扉かな  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 蟻一つ浮かべて小さき子のバケツ  
 母のごとく月のごとくにくらげかな  
 壁抜けの遅参を悔むががんぼか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨入かな  
 雨の夜を螢は歩き嬰は這ふ  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 その中のひときは小さき裸かな

端居する人なきままに日が暮れて  
 夕立の去つて物食ふ寂しさよ  
 切株の如き残生蚊遣の火  
 蚊遣火の紅一点の涼しさよ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 切株に息の根残る虫の声  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりにけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 金銀を雪に散らしてクリスマス  
 土くれの中の石ころ寒椿  
 切株に雪の帽子を被せやる  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 年号の来年変る炬燵かな



発掘を逃れし壺や山桜  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 白梅の秘かに神の梅見かな  
 草餅のほのかな温み子らを待つ  
 切株のまだ新しき春の雨  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 金色の佛を置いて春の闇  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 花漏りを茶碗に受ける宴かな  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 薔薇園の開園を待つ鉄扉かな  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 母のごとく月のごとくにくらげかな  
 壁抜けの遅参を悔むががんぼか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨入かな  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 その中のひときは小さき裸かな  
 端居する人なきままに日が暮れて  
 夕立の去つて物食ふ寂しさよ

切株の如き残生蚊遣の火  
 蚊遣火の紅一点の涼しさよ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 切株に息の根のある虫時雨  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりにけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 金銀を雪に散らしてクリスマス  
 土くれの中の石ころ寒椿  
 切株に雪の帽子を被せやる  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 年号の来年変る炬燵かな

LC21IM	:	M
LC21IC	:	C
LC21IY	:	Y
LC21BK	:	BK



句の句を  
如く長の手

発掘を逃れし壺や春の山  
~~薄氷~~ <sup>は</sup>や切株の上を滑り落つ  
~~白梅~~は神の依代匂ひ立つ  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 草餅のほのかな温み子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 金色の佛も消えて春の闇  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
<sup>はこ3つし ぬに</sup>  
~~繕ひもならずほろほろ~~花の漏り  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
<sup>twi log ck</sup> こんこんと泉古くて新しき  
 薔薇園の開園を待つ鉄扉なり  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨入かな  
 母のごとく月のごとくにくらげかな  
 壁抜けの遅参を悔むががんぼか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
~~切株~~の如き残生蚊遣の火  
 蚊遣火の紅一点の涼しさよ  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 その中のひときは小さき裸かな

端居する人なきままに日が暮れて  
 夕立の去りて物食ふ寂しさよ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
~~切株~~に息の根残る虫時雨  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりにけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
~~金銀~~を雪に散らしてクリスマス  
 煤籠る句帳の上の塵埃  
~~掃いて~~捨て掃いて捨てたる年の暮  
 静かさや猫も寝ている寝正月  
~~切株~~に雪の帽子を被せやる  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 年号の来年変る炬燵かな  
 土くれの中の石ころ寒椿  
 づかづかと 迎への春へ乗り込みぬ <sup>の雨</sup>

歌へ日の  
残る句数を  
書き字了

発掘を逃れし壺や春の山  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 草餅のほのかな温み子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 金色の佛も消えて春の闇  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 綻びし処にほろと花の漏り  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 薔薇園の開園を待つ鉄扉なり  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 母のごとく月のごとくにくらげかな  
 壁抜けの遅参を悔むががんぼか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 蚊遣火の紅一点の涼しさよ  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 その中のひときは小さき裸かな  
 端居する人なきままに日が暮れて  
 夕立の去りて物食ふ寂しさよ  
 踏切のかんかん照りの終戦日

童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 煤籠る句帳の上の塵埃  
 数へ日の残る句数を書き写す  
 静かさや猫も寝ている寝正月  
 土くれの中の石ころ寒の雨  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 年号の来年変る炬燵かな  
 づかづかと迎への春へ乗り込みぬ

知3と子

~~発掘を逃れし壺や春の山~~  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 草餅のほのかな温み子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 金色の佛も消えて春の闇  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 綻びし処にほろと花の漏り  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 薔薇園の開園を待つ鉄扉なり  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 (母のごとく月のごとくにくらげかな)  
 壁抜けの遅参を悔むががんぼか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 (その中のひときは小さき裸かな)  
 端居する人なきままに日が暮れて  
 夕立の去りて物食ふ寂しさよ  
 蚊遣火の紅一点の涼しさよ  
 踏切のかんかん照りの終戦日

よどむ さたし

童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりにけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
~~煤籠る句帳の上の塵埃~~  
~~数へ日の残る句数を書き写す~~  
 静かさや猫も寝ている寝正月  
 土くれの中の石ころ寒の雨  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 年号の来年変わる炬燵かな  
 づかづかと迎への春へ乗り込みぬ

5.25  
 さつくりと天地返しを返  
 秋一つ年の港を後にして

発掘を逃れし壺や春の山  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 草餅のほのかな温み子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 金色の佛も消えて春の闇  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 綻びし処にほろと花の漏り  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 薔薇園の開園を待つ鉄扉なり  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 壁抜けの遅参を悔むががんぼか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 端居する人なきままに日が暮れて  
 夕立の去りて物食ふ寂しさよ  
 蚊遣火の紅一点の涼しさよ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声

われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりにけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 静かさを猫も寝ている寝正月  
 土くれの中の石ころ寒の雨  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 年号の来年変わる炬燵かな  
 づかづかと迎への春へ乗り込みぬ

水底に泥と苔へ筆の空  
 は の筆けさ

蒼白うきまといの折れ曲り

発掘を逃れし壺や春の山  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 草餅のほのかな温み子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 金色の佛も消えて春の闇  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
~~綻びし処にほろと花の漏り~~  
<sup>活字の処々に</sup>  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 薔薇園の開園を待つ鉄扉なり  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 壁抜けの遅参を悔むががんぼか  
<sup>(に間に合ひず)</sup>  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 端居する人なきままに日が暮れて  
 夕立の去りて物食ふ寂しさよ  
 蚊遣火の紅一点の涼しさよ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声

われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりにけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 冷蔵庫少し呻りぬ去年今年  
 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
 葱白う青き処の折れ曲り  
 水底は泥の静けさ寒の鯉  
 土くれの中の石ころ寒の雨  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 年号の来年変る炬燵かな  
 づかづかと迎への春へ乗り込みぬ

夜格にこると白幼紙を接

発掘を逃れし壺や春の山  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 切株は丸い 傷跡 春の虹  
 草餅のほのかな温み子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 金色の佛も消えて春の闇  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 満開の少しゆるびて花の漏り  
 夜桜にごとんと自動販売機  
 ひよろ長き こころ 残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 薔薇園の開園を待つ鉄扉なり  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 壁抜けに間に合はざりしががんぼか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 端居する人なきままに日が暮れて  
 夕立の去りて物食ふ寂しさよ  
 蚊遣火の紅一点の涼しさよ

踏切のかんかん照りの終戦日  
 切株の息の根あはれ秋の風  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりにけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 冷蔵庫少し呻りぬ去年今年  
 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
 葱白う青き処の折れ曲り  
 水底は泥の静けさ寒の鯉  
 土くれの中の石ころ寒の雨  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 年号の来年変る炬燵かな  
 づかづかと迎への春へ乗り込みぬ



発掘を逃れし壺や春の山  
 紅白の梅は依代匂ひ立つ  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 切株は丸い傷跡春の虹  
 草餅のほのかな温み子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 金色の佛も消えて春の闇  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 満開の少しゆるびて花の漏り  
 夜桜にごとんと自動販売機  
 ひよる長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 壁抜けに間に合はざりしががんばるか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 祭笛力合せてゐたりけり  
 夕立を見てゐる巫女のアルバイト  
 夕立の去りて物食ふ寂しさよ

蚊遣火の紅一点の涼しさよ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 切株の息の根あはれ秋の風  
 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりにけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 松手入針千本を惜しげなく  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 葱白う青き処の折れ~~曲り~~  
 冷蔵庫少し呻りぬ去年今年  
 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
 初雀個々に名前は無けれども  
 水底は泥の静けさ寒の鯉  
 土くれの中の石ころ寒の雨  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 年号の来年変る炬燵かな  
 づかづかと迎への春へ乗り込みぬ  
 紫雲英田に遊んでくれてありがたう

紅白の梅は依代句ひ立つ  
~~発掘を逃れし壺や春の山~~  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
~~切株は丸い傷跡春の虹~~  
 草餅のほのかな温み子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 満開の少しゆるびて花の漏り  
 夜桜にごろんと自動販売機  
 金色の佛も消えて春の闇  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
~~牡丹やどかと置かれしランドセル~~  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 壁抜けに間に合はざりしががんぼか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 祭笛力合せてゐたりけり  
 夕立を見てゐる巫女のアルバイト  
 夕立の去りて物食ふ寂しさよ

梅の白く赤く  
 山に花を  
 虹の  
 草餅の  
 煙突の  
 おのづから  
 満開の  
 夜桜に  
 金色の  
 ひよろ  
 塩辛に  
 こんこんと  
 牡丹や  
 飛ぶ虫に  
 錆びたる  
 終列車  
 羽田空港  
 半袖の  
 壁抜けに  
 仕留めて  
 祭笛力  
 夕立を見て  
 夕立の去りて

天よいく  
 なりけり  
 かも  
 花を  
 棄れて

短  
 回  
 の  
 小  
 さ  
 さ  
 丸  
 く  
 結  
 り  
 じ  
 ゃ  
 な  
 り

蚊遣火の紅一点の涼しさよ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 切株の息の根あはれ秋の風  
 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 松手入針千本を惜しげなく  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 葱白う青き処は折れ曲り  
 冷蔵庫少し呻りぬ去年今年  
 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
 初雀個々に名前は無けれども  
 水底は泥の静けさ寒の鯉  
 土くれの中の石ころ寒の雨  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 年号の来年変る炬燵かな  
 づかづかと迎への春へ乗り込みぬ  
 紫雲英田に遊んでくれてありがたう  
 年号の生れまのん冷尻  
 木を  
 大を  
 左  
 のん

雨

を  
 忘  
 れ  
 なく

（  
 言  
 も  
 又  
 も  
 む  
 り  
 け  
 り）

一  
 放  
 の  
 祝  
 く  
 め  
 り  
 向  
 け

年  
 号  
 の  
 生  
 れ  
 ま  
 の  
 ん  
 冷  
 尻  
 木  
 を  
 大  
 を  
 左  
 の  
 ん

紅白の梅は依代匂ひ立つ  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 背伸びして永くなりたる日を思ふ  
 草餅のほのかな温み子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 咲き満ちて少しゆるびて花の漏り  
 夜桜にごろんと自動販売機  
 金色の佛も消えて春の闇  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 壁抜けに間に合はざりしががんぼか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 祭笛力合せてゐたりけり  
 夕立を見てゐる巫女のアルバイト  
 夕立の去りて物食ふ寂しさよ  
 蚊遣火の紅一点の涼しけれ

踏切のかんかん照りの終戦日  
 天高くなりにはけるかも穂を垂れて  
 切株の息の根あはれ秋の風  
 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりにはけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 松手入針千本を容赦なく  
 短日エの小さく丸く籠るリ色なり  
 玄関にブーツを履きて立ち上るこ  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 先の方青く折れたる葱白し  
 年越の大きなものに冷蔵庫  
 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
 一族で祝ぐ如し初雀  
 水底は泥の静けさ寒の鯉  
 土くれの中の石ころ寒の雨  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 年号の来年変る炬燵かな  
 づかづかと迎への春へ乗り込みぬ  
 紫雲英田に遊んでくれてありがたう  
 土くれも石ころもあゝ冬の日が涼

紅白の梅は依代匂ひ立つ  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 背伸びして永くなりたる日を思ふ  
 草餅のほのかな温み子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 咲き満ちて少しゆるびて花の漏り  
 夜桜にごろんと自動販売機  
 金色の佛も消えて春の闇  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 壁抜けに間に合はざりしががんぼか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 祭笛力合せてゐたりけり  
 夕立を見てゐる巫女のアルバイト  
 夕立の去りて物食ふ寂しさよ  
 蚊遣火の紅一点の涼しけれ

雨差に小石あてたる地涼し

踏切のかんかん照りの終戦日  
 天高くなりにはけるかも穂を垂れて  
 切株の息の根あはれ秋の風  
 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 干柿に遠き西日となりにはけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 松手入針千本を容赦なく  
 短日を小さく丸く籠ること  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 先方の青く折れたる葱白し  
 年越の大きなものに冷蔵庫  
 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
 一族のやうに祝ぐ初雀  
 水底は泥の静けさ寒の鯉  
 土くれも石ころもある冬日かな  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 年号の来年変る炬燵かな  
 づかづかと迎への春へ乗り込みぬ  
 紫雲英田に遊んでくれてありがたう  
 雨差の石をなすそ涼しけれ  
 道はたす雨差の涼しけれ

紅白の梅は依代句ひ立つ  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 背伸びして永くなりたる日を思ふ  
 草餅のほのかな温み<sup>に</sup>子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 咲き満ちて少しゆるびて花の漏り  
 夜桜にごろんと自動販売機  
 金色の佛も消えて春の闇  
 ひよる長き蕊<sup>の</sup>残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 壁抜けに間に合はざりしががんぼか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 祭笛力合せてゐたりけり  
 夕立を見てゐる巫女のアルバイト  
 夕立の去りて物食ふ寂しさよ  
 雨垂れに小石並べて地涼し

蚊遣火の紅一点の涼しけれ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 天高くなりにはけるかも穂を垂れて  
 切株の息の根あはれ秋の風  
 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 松手入針千本を容赦なく  
 干柿に遠き西日となりにはけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 短日を小さく丸く籠る~~こと~~<sup>なり</sup>  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 緑濃きところ切られて葱白し  
 年越の大きなものに冷蔵庫  
 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
 一族のやう<sup>に</sup>に祝ぐ初雀<sup>に</sup>  
 土くれも石ころも冬の日を浴びて  
 化ける気もなく眠れる<sup>る</sup>海鼠<sup>に</sup>かな  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 年号の来年変る炬燵かな  
 づかづかと迎への春へ乗り込みぬ  
 紫雲英田に遊んでくれてありがたう

紅白の梅は依代匂ひ立つ  
 発掘は一つ隣りの春の山  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
~~背~~伸びして永くなりたる日を浴びて  
 草餅のほのかに温し子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 咲き満ちて少しゆるびて花の漏り  
 夜桜にごろんと自動販売機  
 金色の佛の見ゆる春の闇  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 壁抜けに間に合はざりしががんぼか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 祭笛力合せてゐたりけり  
 夕立を見てゐる巫女のアルバイト  
 夕立の去りて物食ふ寂しさよ

雨垂れに小石 ~~並べて~~  
 の差 ~~す~~ 地涼し  
 蚊遣火の紅一点の涼しけれ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 天高くなりにはけるかも穂 ~~を垂れて~~  
 穂 ~~はさ~~ 切株は自らの墓秋の風  
 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 松手入針千本を容赦なく  
 干柿に遠き西日となりけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 緑濃きところは捨てて葱白し  
 化ける気もなく海鼠は海の底  
 年越の大きなものに冷蔵庫  
 一族の揃ふ目出度さ初御空  
 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
 年号の来年変る炬燵かな  
 土 ~~くれ~~ も石ころも冬の日を浴びて  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 づかづかと迎への春へ乗り込みぬ  
 紫雲英田に遊んでくれてありがたう

紅白の梅は依代句ひ立つ  
 発掘は一つ隣の春の山  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 虫も来て草木の花も賑やかに  
 背伸びして欠伸して日の永きかな  
 草餅のほのかに温し子を待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 咲き満ちて少しゆるびて花の漏り  
 夜桜にごろんと自動販売機  
 金色の佛の見ゆる春の闇  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 こんこんと泉古くて新しき  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 壁抜けに間に合はざりしががんぼか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 祭笛力合せてみたりけり  
 夕立を見てみる巫女のアルバイト

夕立の去りて物食ふ寂しさよ  
 雨垂れに小石の並ぶ地涼し  
 蚊遣火の紅一点の涼しけれ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 天高くなりけるかも穂は黄金  
 切株は自らの墓秋の風  
 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 松手入針千本を容赦なく  
 干柿に遠き西日となりけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 緑濃きところは捨てて葱白し  
 化ける気もなく海鼠は海の底  
 年越の大きなものに冷蔵庫  
 一族の揃ふ日出度さ初御空  
 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
 年号の来年変る炬燵かな  
 土くれも石ころも冬の日を浴びて  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 づかづかと迎への春へ乗り込みぬ

紫雲英田に遊んでくれてありがたう

初巻 - 後玉連れ  
手リハリ

日の手遅こととさみ合ふ  
念休

虫も来て草木の花も賑やかに  
背伸びして欠伸して日の永きかな

咲き満ちて少しゆるびて花の漏り

金色の佛の見ゆる春の闇

一族の揃ふ日出度さ初御空

紅白の梅は依代句ひ立つ  
 発掘は一つ隣りの春の山  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 日の永きことを言ひ合ふ昼休  
 草餅のほのかに温し子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 咲き満ちて処々に花の漏り  
 夜桜にごろんと自動販売機  
 金色の佛の見ゆる春の闇  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
~~こんこんと泉古くて新しき~~  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 壁抜けに間に合はざりしががんばるか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 祭笛力合せてあたりけり  
 夕立を見てゐる巫女のアルバイト  
 夕立の去りて物食ふ寂しさよ

雨垂れに小石の並ぶ地涼し  
 蚊遣火の紅一点の涼しけれ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 天高くなりにはけるかも穂は黄金  
 切株は自らの墓秋の風  
 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 松手入針千本を容赦なく  
 干柿に遠き西日となりけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 緑濃きところは捨てて葱白し  
 化ける気もなく海鼠は海の底  
 年越の大きなものに冷蔵庫  
 初雀一族を連れ来りけり  
 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
 年号の来年変る炬燵かな  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 づかづかと迎への春へ乗り込みぬ  
 紫雲英田に遊んでくれてありがたう



紅白の梅は依代匂ひ立つ  
 発掘は一つ隣りの春の山  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 日の永きことを言ひ合ふ昼休  
 草餅のほのかに温し子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 咲き満ちて処々に花の漏り  
 夜桜にごろんと自動販売機  
 金色の佛の見ゆる春の闇  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 壁抜けに間に合はざりしががんぼか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 祭笛力合せてゐたりけり  
 夕立を見てゐる巫女のアルバイト  
 夕立の後に飯食ふ寂しさよ  
 雨垂れに小石の並ぶ地涼し

蚊遣火の紅一点の涼しけれ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 天高くなりけるかも穂は黄金  
 切株は自らの墓秋の風  
 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 松手入針千本を容赦なく  
 干柿に遠き西日となりけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 緑濃きところは捨てて葱白し  
 化ける気もなく海鼠は海の底  
 年越の大きなものに冷蔵庫  
 初雀一族を連れ来りけり  
 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
 年号の来年変る炬燵かな  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 づかづかと迎への春へ乗り込みぬ  
 紫雲英田に遊んでくれてありがたう

緑濃きところは捨てて葱白し  
 夕立を見てゐる巫女のアルバイト  
 夕立の後に、飯食ふ寂しさよ  
 夜桜にごろんと自動販売機  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 壁抜けに間に合はざりしががんぼか  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 発掘は一つ隣の春の山  
 年号の来年変る炬燵かな  
 年越の大きなものに冷蔵庫  
 日の永きことを言ひ合ふ昼休  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 天高くなりけるかも穂は黄金  
 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 草餅のほのかに温し子らを待つ  
 切株は自らの墓秋の風  
 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
 松手入針千本を容赦なく  
 初雀一族を連れ来りけり  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ

紫雲英田に遊んでくれてありがたう  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし  
 咲き満ちて処々に花の漏り  
 祭笛力合せてゐたりけり  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 紅白の梅は依代匂ひ立つ  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 金色の佛の見ゆる春の闇  
 干柿に遠き西日となりにけり  
 蚊遣火の紅一点の涼しけれ  
 化ける気もなく海鼠は海の底  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 煙突の「ゆ」の字をぬらす春の雨  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 雨垂れに小石の並ぶ地涼し  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 ひよろ長き蕊残りたる躑躅かな  
 づかづかと迎への春へ乗り込みぬ  
 おのづから時の満ち来る桜かな

夕立を見てゐる

紅白の梅は依代匂ひ立つ  
 はなやかに草木の春や虫も~~来て~~<sup>飛ん</sup>  
 発掘は一つ隣りの春の山  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 日の永きことを言ひ合ふ昼休  
 草餅のほのかに温し子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の大きな「ゆ」の字春の雨  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
~~咲き満ちて~~<sup>お満開の</sup>処々に花の漏り  
 夜桜にごろんと自動販売機  
 金色の佛の見ゆる春の闇  
 ひよろ長き蕊の残りし躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 壁抜けに間に合はざりしががんぼか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 祭笛力合せてゐたりけり  
 夕立の後に飯食ふ寂しさよ  
 雨垂れに小石の並ぶ地涼し

蚊遣火の紅一点の涼しけれ  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 天高くなりけるかも稲穂は黄  
 切株は自らの墓秋の風  
 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 松手入針千本を容赦なく  
 干柿に遠き西日となりけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 緑濃きところは捨てて葱白し  
 化ける気もなく海鼠は海の底  
 年越の大きなものに冷蔵庫  
 初雀一族を連れ来りけり  
 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
 年号の来年変る炬燵かな  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 づかづかと迎への春へ乗り込みぬ  
 紫雲英田に遊んでくれてありがたう

紅白の梅は依代句ひ立つ

終列車彼方に消えて螢舞ふ

松手入針千本を容赦なく

はなやかに草木の春や虫も来て

羽田空港四万六千日の晴れ

干柿に遠き西日となりにけり

発掘は一つ隣りの春の山

半袖の亜米利加人や巴里祭

包丁に林檎の種が付いてをる

雲水の峠を越ゆる蝶々かな

壁抜けに間に合はざりしががんばか

玄関にブーツを履きて立ち上る

日の永きことを言ひ合ふ昼休

仕留めては次の間へ行く蠅叩

ギター背に枯木の中を帰りけり

草餅のほのかに温し子らを待つ

祭笛力合せてゐたりけり

緑濃きところは捨てて葱白し

春宵も余生も値千金ぞ

夕立の後に飯食ふ寂しさよ

化ける気もなく海鼠は海の底

煙突の大きな「ゆ」の字春の雨

雨垂れに小石の並ぶ地涼し

年越の大きなものに冷蔵庫

おのづから時の満ち来る桜かな

蚊遣火の紅一点の涼しけれ

初雀一族を連れ来りけり

咲き満ちて処々に花の漏り

踏切のかんかん照りの終戦日

静かさや猫も寝てゐる寝正月

夜桜にごろんと自動販売機

天高くなりけるかも稲穂は黄

年号の来年変る炬燵かな

金色の佛の見ゆる春の闇

切株は自らの墓秋の風

太陽と同じ丸顔雪達磨

ひよろ長き蕊の残りし躑躅かな

寂しさを埋めて秋草なに咲かそ

づかづかと迎への春へ乗り込みぬ

塩辛に烏賊や鰹や夏始

童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声

紫雲英田に遊んでくれてありがたう

牡丹やどかと置かれしランドセル

虫籠は終の棲家や茄子胡瓜

飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り

黒で書き赤で書き足す夜長かな

錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし

われの銀河なれの銀河へ重なりぬ

の句へ了神 飛び 此部の依代句よ

有満同の

踏切の

後活 ↓ゴカネの

十二月二十一日

つふふふ

神にっかへて梅句よ

紅白の梅の匂へる神の里

はなやかに草木の春や虫も飛び

発掘は一つ隣りの春の山

雲水の峠を越ゆる蝶々かな

日の永こなりたることきを言ひ合ふ昼休

草餅のほのかに温し子らを待つ

春宵も余生も値千金ぞ

煙突の大きな「ゆ」の字春の雨

おのづから時の満ち来る桜かな

満開の処々に花の漏り

夜桜にごろんと自動販売機

金色の佛の見ゆる春の闇

ひよろ長き蕊の残りし躑躅かな

塩辛に烏賊や鰹や夏始

牡丹やどかと置かれしランドセル

飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り

錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし

終列車彼方に消えて螢舞ふ

羽田空港四万六千日の晴れ

半袖の亜米利加人や巴里祭

壁お水の流るる抜けに間に合はざりしががんばか

仕留めては次の間へ行く蠅叩

祭笛力合せてあたりけり

夕立の後に飯食ふ寂しさよ

雨垂れに小石の並ぶ地涼し

蚊遣火の紅一点の涼しけれ

すやすやと赤子ほのかに天花粉

踏切のかんかん照りの終戦日

天高くなりにつけるかも黄金の穂

切株は自らの墓秋の風

寂しさを埋めて秋草なに咲かそ

童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声

虫籠は終の棲家や茄子胡瓜

黒で書き赤で書き足す夜長かな

われ銀河なれの銀河へ重なりぬ

松手入針千本をお軒下容赦なく

干柿に遠き西日となりおかわたるにけり

包丁に林檎の種が付いてをる

玄関にブーツを履きて立ち上る

ギター背に枯木の中を帰りけり

緑濃きところは捨てて葱白し

化ける気もなく海鼠は海の底

十二月三十一日冷蔵庫

初雀一族を連れ来りけり

静かさや猫も寝てゐる寝正月

年号の来年変る炬燵かな

太陽と同じ丸顔雪達磨

づかづかと迎への春おまたやうた乗り込みぬ

紫雲英田に遊んでくれてありがたう

黙読回改?

紅白の梅の匂へる神の里  
 はなやかに草木の春や虫も飛び  
 発掘は一つ隣りの春の山  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 日の永くなりたることを昼休  
 草餅のほのかに温し子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の大きな「ゆ」の字春の雨  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 満開の処々に花の漏り  
 夜桜にごろんと自動販売機  
 金色の佛の見ゆる春の闇  
 ひよろ長き蕊の残りし躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始

終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 祭笛力合せ<sup>と</sup>あたりけり  
 夕立の後に飯食ふ寂しさよ  
 雨垂れに小石の並ぶ地涼し  
 壁抜けに間に合はざりしががんばか  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 蚊遣火の紅一点の涼しけれ  
 すやすやと赤子ほのかに天花粉  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 天高くなりにつけるかも黄金の穂  
 切株は自らの墓秋の風  
 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな

われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 剥<sup>軒下</sup>かれたる裸の柿の干されある  
 松手入針千本を容赦なく  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 緑濃きところは捨てて葱白し  
 化ける気もなく海鼠は海の底  
 十二月三十一日冷蔵庫  
 初雀一族を連れ来りけり  
 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
 年号の来年変る炬燵かな  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 紫雲英田に遊んでくれてありがたう  
 ご機嫌よう迎への春が来たやうだ

212218  
 やった

紅白の梅の匂へる神の里  
 はなやかに草木の春や虫も飛び  
 発掘は一つ隣りの春の山  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 日の永くなりたることを昼休  
 草餅のほのかに温し子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の大きな「ゆ」の字春の雨  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 満開の処々に花の漏り  
 夜桜にごろんと自動販売機  
 金色の佛の見ゆる春の闇  
 ひよろ長き蕊の残りし躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 錆びたるは硬く黴びたるは柔らかし

終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ  
 半袖の亜米利加人や巴里祭  
 祭笛力を合せゐたりけり  
 夕立の後に飯食ふ寂しさよ  
 雨垂れに小石の並ぶ地涼し  
 壁抜けに間に合はざりし蚊の姥か  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 蚊遣火の紅一点の涼しけれ  
 すやすやと赤子ほのかに天花粉  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 切株は自らの墓秋の風  
 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ  
 天高くなりけるかも黄金の穂  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな

われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
 松手入針千本を容赦なく  
 軒下に裸の柿の干されある  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 緑濃きところは捨てて葱白し  
 化ける氣もなく海鼠は海の底  
 十二月三十一日冷蔵庫  
 初雀一族を連れ来りけり  
 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
 年号の来年変る炬燵かな  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 紫雲英田に遊んでくれてありがたう  
 ご機嫌よう迎への春が来たやうだ

いささそぼへへの春に乗りこけぬ  
 飛ぶ虫つて  
 川はやく





紅白の梅の匂へる神の里

終列車彼方に消えて螢舞ふ

われの銀河なれの銀河へ重なりぬ

蝶飛んで花の季節そよササの春となりけり

羽田空港四万六千日の晴れ

松手入針千本を容赦なく

雲水の峠を越ゆる蝶々かな

半袖の亜米利加人や巴里祭

軒下に裸の柿の吊られある

発掘は一つ隣りの春の山

~~祭~~笛力を合あせたりけり

包丁に林檎の種が付いてをる

日の永くなりたることを昼休

夕立の後に飯食ふ寂しさよ

玄関にブーツを履きて立ち上る

草餅のほのかに温し子らを待つ

雨垂れに涼しき小石並びたる

ギター背に枯木の中を帰りけり

春宵も余生も値千金ぞ

壁抜けに間に合はざりし蚊の姥か

緑濃きところは捨てて葱白し

煙突の大きな「ゆ」の字春の雨

仕留めては次の間へ行く蠅叩

海底冬を深まの海鼠冬を深まに化けて何もせず

おのづから時の満ち来る桜かな

蚊遣火の紅一点の涼しけれ

十二月冬を深ま三十一日冬を深ま来りけり

満開の一点ついに花の漏り

すやすやと赤子ほのかに天花粉

国家とは大いなる家初御空

夜桜にごろんと自動販売機

踏切のかんかん照りの終戦日

静かさや猫も寝てゐる寝正月

金色の佛の見ゆる春の闇

切株は自らの墓秋の風

初雀一族冬を深まを連れ来りけり

ひよる長き蕊の残りし躑躅かな

寂しさを埋めて秋草この木の茎を埋めてな茎を埋めてに咲かそ

年号の来年変る炬燵かな

塩辛に烏賊や鰹や夏始

天高くなり茎を埋めてにけるかも黄金の穂

太陽と同じ丸顔雪達磨

牡丹やどかと置かれしランドセル

童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声

紫雲英田に遊んでくれてありがたう

飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り

虫籠は終の棲家や茄子胡瓜

ご機嫌よう迎への春が来たやうだ

~~自~~転車のサドルの黴に驚きぬ

黒で書き赤で書き足す夜長かな

せい海の海鼠に化けて海鼠の尻

紅白の梅の匂へる神の里 終列車彼方に消えて螢舞ふ 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
蝶飛んで百花の春となりにけり 羽田空港四万六千日の晴れ われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
雲水の峠を越ゆる蝶々かな 半袖の亜米利加人や巴里祭 松手入針千本を容赦なく  
発掘は一つ隣りの春の山 澄みわたる力なりけり祭笛 軒下に裸の柿の吊られある  
日の永くなりたることを昼休 その中のひときは小さき裸かな 包丁に林檎の種が付いてをる  
草餅のほのかに温し子らを待つ 夕立の後に飯食ふ寂しさよ 玄関にブーツを履きて立ち上る  
春宵も余生も値千金ぞ 雨垂れに涼しき小石並びたる ギター背に枯木の中を帰りけり  
煙突の大きな「ゆ」の字春の雨 壁抜けに間に合はざりし蚊の姥か 緑濃きところは捨てて葱白と  
おのづから時の満ち来る桜かな 仕留めては次の間へ行く蠅叩 荒海の海鼠に化けて海の底  
満開の一点つひに花の漏り 蚊遣火の紅一点の涼しけれ 十二月三十一日来りけり  
夜桜にごろんと自動販売機 すやすやと赤子ほのかに天花粉 国家とは大いなる家初御空  
金色の佛の見ゆる春の闇 踏切のかんかん照りの終戦日 初雀一家を連れて来りけり  
ひよろ長き蕊の残りし躑躅かな 切株は墓標なりけり秋の風 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
塩辛に烏賊や鰹や夏始 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ 年号の来年変る炬燵かな  
牡丹やどかと置かれしランドセル 天高くなりけるかも黄金の穂 太陽と同じ丸顔雪達磨  
飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声 紫雲英田に遊んでくれてありがたう  
自転車のサドルの黴に驚きぬ 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜 ご機嫌よう迎への春が来たやうだ

紅白の梅の匂へる神の里

蝶飛んで百花の春となりにけり

雲水の峠を越ゆる蝶々かな

発掘は一つ隣りの春の山

日の永くなりたることを昼休

草餅のほのかに温し子らを待つ

春宵も余生も値千金ぞ

煙突の大きな「ゆ」の字春の雨

おのづから時の満ち来る桜かな

満開の一点つひに花の漏り

夜桜にごろんと自動販売機

金色の佛の見ゆる春の闇

ひよろ長き蕊の残りし躑躅かな

塩辛に烏賊や鰹や夏始

牡丹やどかと置かれしランドセル

飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り

~~自~~転車のサドルの黴に驚きぬ

終列車彼方に消えて螢舞ふ

羽田空港四万六千日の晴れ

半袖の亜米利加人や巴里祭

~~澄~~みわたる力なりけり祭笛

その中のひときは小さき裸かな

夕立後の強き火使ふ夕餉かな

雨垂れに涼しき小石敷き詰めて

壁抜けに間に合はざりし蚊の姥か

仕留めては次の間へ行く蠅叩

蚊遣火の紅一点の涼しさよ

すやすやと赤子ほのかに天花粉

踏切のかんかん照りの終戦日

切株は即ち墓標秋の風

寂しさを埋めて秋草なに咲かそ

天高くなりけるかも黄金の穂

童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声

虫籠は終の棲家や茄子胡瓜

黒で書き赤で書き足す夜長かな

われの銀河なれの銀河へ重なりぬ

松手入針千本を容赦なく

軒下に裸の柿の吊られある

包丁に林檎の種が付いてをる

玄関にブーツを履きて立ち上る

ギター背に枯木の中を帰りけり

緑濃きところは捨てて葱の白

願はくは海鼠のままに海の底

十二月三十一日来りけり

国家とは大いなる家初御空

目出度さや番ひで弾む初雀

静かさや猫も寝てゐる寝正月

年号の来年変る炬燵かな

太陽と同じ丸顔雪達磨

紫雲英田に遊んでくれてありがたう

ご機嫌よう迎への春が来たやうだ

吾を呼ぶ原の草や  
吾を呼ぶは雨もまじりぬ  
17行3段組 2018年5月28日 12:33 へ1 桐9

紅白の梅の匂へる神の里 羽田空港四万六千日の晴れ われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
蝶飛んで百花の春となりにけり 半袖の亜米利加人や巴里祭 松手入針千本を容赦なく  
雲水の峠を越ゆる蝶々かな 黒雲に雷鳴り初めし祭笛 錆釘に柿の裸を吊しけり  
発掘は一つ隣りの春の山 その中のひときは小さき裸の子<sup>ト</sup> 包丁に林檎の種が付いてをる  
日の永くなりたることを昼休 夕立後の強き火使ふ夕餉かな 玄関にブーツを履きて立ち上る  
草餅のほのかに温し子らを待つ 雨垂れに涼しき小石敷き詰めて ギター背に枯木の中を帰りけり  
春宵も余生も値千金ぞ 壁抜けに間に合はざりし蚊の姥か 緑濃きところは捨てて葱の白  
煙突の大きな「ゆ」の字春の雨 仕留めては次の間へ行く蠅叩 着底の潜水艦と海鼠かな  
おのづから時の満ち来る桜かな 蚊遣火の紅一点の涼しさよ 十二月三十一日来りけり  
満開の一点つひに花の漏り すやすやと赤子ほのかに天花粉 国家とは大いなる家初御空  
夜桜にごろんと自動販売機 踏切のかんかん照りの終戦日 目出度さや番ひで弾む初雀  
金色の佛の見ゆる春<sup>等</sup>の闇 切株は即ち墓標秋の風 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
ひよろ長き蕊の残りし躑躅かな 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ 年号の来年変る炬燵かな  
塩辛に烏賊や鰹や夏始 天高くなりけるかも黄金の穂 太陽と同じ丸顔雪達磨  
牡丹やどかと置かれしランドセル 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声 紫雲英田に遊んでくれてありがたう  
飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜 ご機嫌よう迎への春が来たやうだ  
終列車彼方に消えて螢舞ふ 黒で書き赤で書き足す夜長かな

紅白の梅の匂へる神の里  
 蝶飛んで百花の春となりにけり  
 雲水の峠を越ゆる蝶々かな  
 発掘は一つ隣りの春の山  
 日の永くなりたることを昼休  
 草餅のほかに温し子らを待つ  
 春宵も余生も値千金ぞ  
 煙突の大きな「ゆ」の字春の雨  
 おのづから時の満ち来る桜かな  
 満開の一点つひに花の漏り  
 夜桜にごろんと自動販売機  
 ひよろ長き蕊の残りし躑躅かな  
 塩辛に烏賊や鰹や夏始  
 牡丹やどかと置かれしランドセル  
 飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り  
 終列車彼方に消えて螢舞ふ  
 羽田空港四万六千日の晴れ

半袖の亜米利加人や巴里祭  
 黒雲に雷鳴り初めし祭笛  
 その中のひときは小さき裸子よ  
 夕立後の強き火使ふ夕餉かな  
 雨垂れに涼しき小石敷き詰めて  
 壁抜けに間に合はざりし蚊の姥か  
 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
 蚊遣火の紅一点の涼しさよ  
 すやすやと赤子ほのかに天花粉  
 踏切のかんかん照りの終戦日  
 切株は即ち墓標秋の風  
 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ  
 天高くなりけるかも黄金の穂  
 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜  
 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
 われの銀河なれの銀河へ重なりぬ

金色の佛尊し秋の闇  
 松手入針千本を容赦なく  
 錆釘に柿の裸を吊しけり  
 包丁に林檎の種が付いてをる  
 玄関にブーツを履きて立ち上る  
 ギター背に枯木の中を帰りけり  
 緑濃きところは捨てて葱の白  
 着底の潜水艦と海鼠かな  
 十二月三十一日来りけり  
 国家とは大いなる家初御空  
 目出度さや番ひで弾む初雀  
 静かさや猫も寝てゐる寝正月  
 年号の来年変る炬燵かな  
 太陽と同じ丸顔雪達磨  
 紫雲英田に遊んでくれてありがたう  
 ご機嫌よう迎への春が来たやうだ

紅白の梅の匂へる神の里 半袖の亜米利加人や巴里祭  
蝶飛んで百花の春となりにけり 黒雲に雷鳴り初めし祭笛  
雲水の峠を越ゆる蝶々かな その中のひときは小さき裸子よ  
発掘は一つ隣りの春の山 夕立後の強き火使ふ夕餉かな  
日の永くなりたることを昼休 雨垂れに涼しき小石敷き詰めて  
草餅のほのかに温し子らを待つ 壁抜けに間に合はざりし蚊の姥か  
春宵も余生も値千金ぞ 仕留めては次の間へ行く蠅叩  
煙突の大きな「ゆ」の字春の雨 蚊遣火の紅一点の涼しさよ  
おのづから時の満ち来る桜かな すやすやと赤子ほのかに天花粉  
満開の一点つひに花の漏り 踏切のかんかん照りの終戦日  
夜桜にごろんと自動販売機 切株は即ち墓標秋の風  
ひよろ長き蕊の残りし躑躅かな 寂しさを埋めて秋草なに咲かそ  
塩辛に烏賊や鰹や夏始 天高くなりけるかも黄金の穂  
牡丹やどかと置かれしランドセル 童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声  
飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り 虫籠は終の棲家や茄子胡瓜  
終列車彼方に消えて螢かな 黒で書き赤で書き足す夜長かな  
羽田空港四万六千日の晴れ 金色の佛拝む秋の闇  
われの銀河なれの銀河へ重なりぬ  
松手入針千本を降らせつつ  
古釘に柿の裸を吊しけり  
包丁に林檎の種が付いてをる  
玄関にブーツを履きて立ち上る  
ギター背に枯木の中を帰りけり  
緑濃きところは捨てて葱の白  
化ける気もなく海鼠のままである  
十二月三十一日来りけり  
国家とは大いなる家初御空  
松が枝に番ひで弾む初雀  
静かさや猫も寝てゐる寝正月  
年号の来年変る炬燵かな  
太陽と同じ丸顔雪達磨  
紫雲英田に遊んでくれてありがたう  
ご機嫌よう迎への春が来たやうだ

紅白の梅の匂へる神の里	半袖の亜米利加人や巴里祭	われの銀河なれの銀河へ重なりぬ
蝶飛んで百花の春となりにけり	黒雲に雷鳴り初めし祭笛	松手入針千本を降らせつつ
雲水の峠を越ゆる蝶々かな	裸子の中のひときは <small>小さき子よ</small>	古釘に柿の裸を吊しけり
発掘は一つ隣りの春の山	夕立後の強き火使ふ夕餉かな	包丁に林檎の種が付いてをる
日の永くなりたることを昼休	雨垂れに涼しき小石敷き詰めて	玄関にブーツを履きて立ち上る
草餅のほのかに温し子らを待つ	壁抜けに間に合はざりし蚊の姥か	ギター背に枯木の中を帰りけり
春宵も余生も値千金ぞ	仕留めては次の間へ行く蠅叩	緑濃きところは捨てて葱白し
煙突の大きな「ゆ」の字春の雨	蚊遣火の紅一点の涼しさよ	化ける気もなく海鼠のままである
おのづから時の満ち来る桜かな	<sup>R?</sup> すやすやと赤子ほのかに天花粉	十二月三十一日来りけり
満開の一点つひに花の漏り	踏切のかんかん照りの終戦日	国家とは大いなる家初御空
引く波の砂にこするる桜貝	切株は即ち墓標秋の風	松が枝に番ひで弾む初雀
ひよろ長き蕊の残りし躑躅かな	寂しさを埋めて秋草なに咲かそ	静かさや猫も寝てゐる寝正月
塩辛に烏賊や鰹や夏始	天高くなりけるかも黄金の穂	年号の来年変る炬燵かな
牡丹やどかと置かれしランドセル	童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声	太陽と同じ丸顔雪達磨
飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り	虫籠は終の棲家や茄子胡瓜	紫雲英田に遊んでくれてありがたう
終列車彼方に消ゆる螢かな	黒で書き赤で書き足す夜長かな	ご機嫌よう迎への春が来たやうだ
羽田空港四万六千日の晴れ	金色の秘佛を納め秋の闇	

紅白の梅の匂へる神の里

半袖の亜米利加人や巴里祭

われの銀河なれの銀河へ重なりぬ

蝶飛んで百花の春となりにけり

雷の近づいて来る祭笛

松手入針千本を降らせつつ

雲水の峠を越ゆる蝶々かな

裸子の中のひときはちひさな子

古釘に柿の裸を吊しけり

発掘は一つ隣りの春の山

夕立後の強き火使ふ夕餉かな

包丁に林檎の種が付いてをる

日の永くなりたることを昼休

雨だれが小石に弾け金魚玉

玄関にブーツを履きて立ち上る

草餅のほのかに温し子らを待つ

壁抜けに間に合はざりし蚊の姥か

ギター背に枯木の中を帰りけり

春宵も余生も値千金ぞ

仕留めては次の間へ行く蠅叩

緑濃きところは捨てて葱白し

煙突の大きな「ゆ」の字春の闇

蚊遣火の紅一点の涼しさよ

化ける気もなく海鼠のままである

おのづから時の満ち来る桜かな

すやすやと赤子ほのかに天花粉

十二月三十一日来りけり

満開の一点つひに花の漏り

踏切のかんかん照りの終戦日

国家とは大いなる家初御空

引く波の砂にこするる桜貝

切株は即ち墓標秋の風

松が枝に番ひで弾む初雀

ひよろ長き蕊の残りし躑躅かな

寂しさを埋めて秋草なに咲かそ

静かさや猫も寝てゐる寝正月

塩辛に烏賊や鱧や夏始

天高くなりけるかも黄金の穂

年号の来年変る炬燵かな

牡丹やどかと置かれしランドセル

童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声

太陽と同じ丸顔雪達磨

飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り

虫籠は終の棲家や茄子胡瓜

紫雲英田に遊んでくれてありがたう

終列車彼方に消ゆる螢かな

黒で書き赤で書き足す夜長かな

ご機嫌よう迎への春が来たやうだ

羽田空港四万六千日の晴れ

菊の香の神や仏の夜長かな

ご機嫌よう迎への春が来たやうだ



紅白の梅の匂へる神の里

半袖の亜米利加人や巴里祭

松手入針千本を降らせつつ

蝶飛んで百花の春となりにけり

雷の近づいて来る祭笛

古釘に柿の裸を吊しけり

雲水の峠を越ゆる蝶々かな

裸子の中のひときはちひさな子

包丁に林檎の種が付いてをる

発掘は一つ隣りの春の山

夕立後の強き火使ふ夕餉かな

玄関にブーツを履きて立ち上る

日の永くなりたることを昼休

雨だれが石に弾けて金魚玉

ギター背に枯木の中を帰りけり

草餅のほのかに温しを待つ

壁抜けに間に合はざりし蚊の姥か

緑濃きところは捨てて葱白し

春宵も余生も値千金ぞ

仕留めては次の間へ行く蠅叩

化ける気もなく海鼠のままである

煙突の大きな「ゆ」の字春の闇

蚊遣火の紅一点の涼しさよ

十二月三十一日来りけり

おのづから時の満ち来る桜かな

すやすやと赤子ほのかに天花粉

ゆく年の窓開けてみる直ぐ閉める

満開の一点つひに花の漏り

踏切のかんかん照りの終戦日

国家とは大いなる家初御空

引く波の砂にこするる桜貝

切株は即ち墓標秋の風

松が枝に番ひで弾む初雀

蕊だけがひよろりと伸びし躑躅かな

寂しさを埋めて秋草なに咲かそ

静かさや猫も寝てゐる寝正月

塩辛に烏賊や鱧や夏始

天高くなりけるかも黄金の穂

年号の来年変る炬燵かな

牡丹やどかと置かれしランドセル

童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声

太陽と同じ丸顔雪達磨

飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り

虫籠は終の棲家や茄子胡瓜

紫雲英田に遊んでくれてありがたう

終列車彼方に消ゆる螢かな

菊の香に神や仏の夜長かな

ご機嫌よう迎への春が来たやうだ

羽田空港四万六千日の晴れ

われの銀河なれの銀河へ重なりぬ

迎への春

ハードエッジ

2018.5.29

紅白の梅の匂へる神の里

蝶飛んで百花の春となりけり

雲水の峠を越ゆる蝶々かな

発掘は一つ隣の春の山

日の永くなりたることを昼休

草餅のほのかに温し子を待つ

春宵も余生も値千金ぞ

煙突の大きな「ゆ」の字春の雨

おのづから時の満ち来る桜かな

満開の一点つひに花の漏

~~夜桜にどろんどろんと自動販売機~~

ひよろ長き蕊の残りし躑躅かな

塩辛に烏賊や鰹や夏始

牡丹やどかと置かれしランドセル

飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り

終列車彼方に消えて螢かな

羽田空港四万六千日の晴れ

半袖の亜米利加人や巴里祭

黒雲に雷鳴り初めし祭笛

裸子の中のひときは小さき子よ

夕立後の強き火使ふ夕餉かな

雨垂れに涼しき小石敷き詰めて

壁抜けに間に合はざりし蚊の姥か

仕留めては次の間へ行く蠅叩

蚊遣火の紅一点の涼しさよ

すやすやと赤子ほのかに天花粉

踏切のかんかん照りの終戦日

切株は即ち墓標秋の風

寂しさを埋めて秋草なに咲かそ

天高くなりけるかも黄金の穂

童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声

虫籠は終の棲家や茄子胡瓜

黒で書き赤で書き足す夜長かな

金色の秘佛を納め秋の闇

われの銀河なれの銀河へ重なりぬ

松手入針千本を降らせつつ

古釘に柿の裸を吊しけり

包丁に林檎の種が付いてをる

玄関にブーツを履きて立ち上る

ギター背に枯木の中を帰りけり

緑濃きところは捨てて葱白し

化ける気もなく海鼠のままである

十二月三十一日来りけり

国家とは大いなる家初御空

松が枝に番ひで弾む初雀

静かさや猫も寝てゐる寝正月

年号の来年変る炬燵かな

太陽と同じ丸顔雪達磨

紫雲英田に遊んでくれてありがたう

ご機嫌よう迎への春が来たやうだ

迎への春

ハードエッジ

5.30?

紅白の梅の匂へる神の里

蝶飛んで百花の春となりにけり

雲水の峠を越ゆる蝶々かな

発掘は一つ隣の春の山

日の永くなりたることを昼休

草餅のほのかに温し子らを待つ

春宵も余生も値千金ぞ

煙突の大きな「ゆ」の字春の闇

おのづから時の満ち来る桜かな

満開の一点つひに花の漏り

引く波の砂にこするる桜貝

引く波の砂にこするる桜貝  
引く波の砂にこするる桜貝  
引く波の砂にこするる桜貝

ひよろ長き蕊の残りし躑躅かな

塩辛に烏賊や鱈や夏始

牡丹やどかと置かれしランドセル

飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り

終列車彼方に消ゆる螢かな

羽田空港四万六千日の晴れ

半袖の亜米利加人や巴里祭

雷の近づいて来る祭笛

裸子の中のひときはちひさな子

夕立後の強き火使ふ夕餉かな

雨だれが小石に弾け金魚玉

壁抜けに間に合はざりし蚊の姥か

仕留めては次の間へ行く蠅叩

蚊遣火の紅一点の涼しさよ

すやすやと赤子ほのかに天花粉

踏切のかんかん照りの終戦日

切株は即ち墓標秋の風

寂しさを埋めて秋草なに咲かそ

天高くなりけるかも黄金の穂

童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声

虫籠は終の棲家や茄子胡瓜

黒で書き赤で書き足す夜長かな

菊の香の神や仏の夜長かな

われの銀河なれの銀河へ重なりぬ

松手入針千本を降らせつつ

古釘に柿の裸を吊しけり

包丁に林檎の種が付いてをる

△  
c. 1485 57

玄関にブーツを履きて立ち上る

ギター背に枯木の中を帰りけり

緑濃きところは捨てて葱白し

化ける気もなく海鼠のままである

十二月三十一日来りけり

国家とは大いなる家初御空

松が枝に番ひで弾む初雀

静かさや猫も寝てゐる寝正月

年号の来年変る炬燵かな

太陽と同じ丸顔雪達磨

紫雲英田に遊んでくれてありがとう

ご機嫌よう迎への春が来たやうだ

7才上 せんいん  
社 好みの年路

2018.5.30

迎への春

ハードエッジ

紅白の梅の匂へる神の里

蝶飛んで百花の春となりけり

雲水の峠を越ゆる蝶々かな

発掘は一つ隣の春の山

日の永くなりたることを昼休

草餅のほのかに温し子らを待つ

春宵も余生も値千金ぞ

煙突の大きな「ゆ」の字春の闇

おのづから時の満ち来る桜かな

満開の一点つひに花の漏り

引く波の砂にこする桜貝

残りたる蕊がひよろりと躑躅かな

塩辛に烏賊や鯉や夏始

牡丹やどかと置かれしランドセル

飛ぶ虫に這ふ虫も出て梅雨の入り

終列車彼方に消ゆる螢かな

羽田空港四万六千日の晴れ

半袖の亜米利加人や巴里祭

たひたひ  
ひよう  
さくも  
さる

たひたひ  
残り

残り ← → 近

date



雷の近づいて来る祭笛

裸子の中のひときはちひさな子

夕立後の強き火使ふ夕餉かな

雨だれが水石に弾け<sup>2</sup>金魚玉

壁抜けに間に合はざりし蚊の姥か

仕留めては次の間へ行く蠅叩

蚊遣火の紅一点の涼しさよ

すやすやと赤子ほのかに天花粉

踏切のかんかん照りの終戦日

切株は即ち墓標秋の風

寂しさを埋めて秋草なに咲かそ

天高くなり<sup>1</sup>にけるかも黄金の穂

童謡が「あれ」と歌ふよ虫の声

虫籠は終の棲家や茄子胡瓜

菊の香に神や仏の夜長かな

黒で書き赤で書き足す夜長かな

われの銀河なれの銀河へ重なりぬ

松手入針千本を降らせつつ

古釘に柿の裸を吊しけり

包丁に林檎の種が付いてをる

030

~~玄關にブーツを履きて立ち上る~~

~~ギター背に枯木の中を帰りけり~~

緑濃きところは捨てて葱白し

化ける気もなく海鼠のままである

十二月三十一日来りけり

国家とは大いなる家初御空

松が枝に番ひで弾む初雀

静かさや猫も寝てゐる寝正月

年号の来年変る炬燵かな

太陽と同じ丸顔雪達磨

紫雲英田に遊んでくれてありがたう

ご機嫌よう迎への春が来たやうだ

tw?  
たれに  
ハズレや  
おかし  
白かあり

ゆく年の夜

30  
5

4/5

pdf → リンク  
2018.5.31

迎へ の 春

ハ ー ド エ ッ ジ

紅 白 の 梅 の 匂 へ る 神 の 里

蝶 飛 ん で 百 花 の 春 と な り に け り

雲 水 の 峠 を 越 ゆ る 蝶 々 か な

発 掘 は 一 つ 隣 り の 春 の 山

日 の 永 く な り た る こ と を 昼 休

草 餅 の ほ の か に 温 し 子 ら を 待 つ

春 宵 も 余 生 も 値 千 金 ぞ

煙 突 の 大 き な 「 ゆ 」 の 字 春 の 闇

お の つ か ら 時 の 満 ち 来 る 桜 か な

満 開 の 一 点 つ ひ に 花 の 漏 り

引 く 波 の 砂 に こ す る る 桜 貝

蕊 だ け が ひ よ ろ り と 伸 び し 躑 躅 か な

塩 辛 に 烏 賊 や 鰹 や 夏 始

牡 丹 や ど か と 置 か れ し ラ ン ド セ ル

飛 ぶ 虫 に 這 ふ 虫 も 出 て 梅 雨 の 入 り

終 列 車 彼 方 に 消 ゆ る 螢 か な

羽 田 空 港 四 万 六 千 日 の 晴 れ

半 袖 の 亜 米 利 加 人 や 巴 里 祭